
神隠し物語

白江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神隠し物語

【Nコード】

N2324V

【作者名】

白江

【あらすじ】

心に傷を負っているながらもそんな空気を微塵も見せない主人公が神隠しにあう。はたしてその理由と意味とは？そしてこれから何をするのか。右も左もわからない状態での突然のスタート。誰彼構わず助けようとする主人公がいたり、まれに殺しかかってくる奴もいたり、まれに助けしてくれる奴もいたり。まだまだこの世界は奥が深く、いつまでも居たいと思わせる空気に満ちている。

01 現状把握

僕は妹を傷つけた。結果家庭は崩壊し、帰る場所を失った。心には罪悪感が残った。

僕は大切な、大切だった友達を傷つけた。結果人間関係が崩壊し、居場所を失った。心には後悔が残った。

帰る場所を失い、居場所も無くなった僕は逃げるしかなかった。正当化するつもりはない。誰が悪くて、何が悪くて、どうしてこうなったのか、全て分かっている。僕だ、僕が悪いのだ。

逃走はみじめだ。これ以上ないほどみじめだ。自分がしてきたことすべてに背を向け、自分をつくっていたものすべてに背を向けて逃走。走って逃げる。行き着く先も分からずに、行き着く当てもなく、ただただ逃げる。

気づけば見渡す限り木ばかりだった。いつの間にか森に入っていたらしい。上を見ると木々に覆われて空が見えない。だが覚えている限り付近にこんな大きな森なんてあっただろうか？それに、これほどの木々となると山の中に入ったのか？…そういえば家の近くに規模の小さい神社があったっけ。でもこんな大きな森ではなかったはずだ…。

考えれば考えるほど分からない。どうやってここまで来たかも覚えてない。これぞまさに手詰まりだ。ここにきて逃げてきたことへの後悔がでてきた。ここまで来て戻れないよな、という変なプライドまででてきた。

結局、もと来た方へ戻れば知り合いに会うかもしれない、と自分を納得させ、最悪木の根をかじるはめになる道を選んだ。なんてみ

じめ。これこそ逃走。

その時、どこかでカサカサッと軽く葉が擦れる音がした。周りを見渡すがそれ以上音はしない。なぜかほほを汗が伝う。そして後ろから軽い衝撃があり、足から力が抜けていくのを感じた。立っていられなくなり前のめりに倒れる。催眠ガスか何かなのかろくに思考することもままならず意識が遠のいていくのを感じた。最後に蝶の柄の真つ赤な和服の裾と下駄が眼の端に映った気がした。

気がつくと僕は布団の上だった。見たことのない天井に見たことのない部屋。どこか気品を感じさせる八畳ほどの和室。襖の向こうから声が聞こえてくるがよく聞き取れない。そして、すつと襖が開いた。

「気がついたな。呆けてないでさっさと起きろ。ああ布団はそのままでもいいから。」

狐の面を付けた背の高い人物が立っていた。体格から女性だとわかる。

「あの…ここは？」

「それも含めて説明してやるからこつちに来い」

そう言うつと戻って行ってしまった。僕はまだぼやける頭を振り立ち上がり部屋を出た。そこは応接室のようだった。奇怪なオブジェ多数と小さな机を境に椅子が一脚ずつ置かれている。向こう側に彼女は座ってキセルをふかしている。狐の面は、外していた。髪の色は黒で長くストレート。顔は整っていて見た目は十代後半から二十代前半といったところだろうか。彼女はこちらに気づくとニヒルに笑った。

「思った以上に元気そうじゃないか。頑丈なのか、慣れているのか、はたまたそもそもそんな感情自体無いのか。」

「いったい何の話ですか？それよりこれはどういう状況なんですか？今少し記憶がぼやけてて。」

言いながら椅子に座る。正面に対峙すると威圧感がすごい。眼を見ていると吸い込まれそうだ。

「うん。それはだねえ、私が君が近くの森で倒れているのを見つけて助けてやったんだ。」

「ああそういえば……。：助けていただきありがとうございます。お礼はします。それでは。」

そう言って立ち上がる。本心はこの奇怪な空間から一刻も早く逃げ出したいだけだ。

「まあ待て。結論から言うと君は帰れない。」

何を言っているんだこの人は？そう思っただけか、しげな眼をむけるも依然としてニヒルな笑みをたたえているだけだ。心なしか最初より楽しそうだ。

「どうしてですか？」

「実は君に憑いている神様から探し物の依頼を受けてね、利害が一致したから依頼を受けることにしたんだ。」

「…は？」

いろいろとおかしい。僕に神様が憑いていて、その神様がこの人に探し物の依頼をして、だから帰れないと？

「もう決まったことだ。契約で私が君の衣食住を受け持つことになった。これからこの店、よろずや凜で店員として働いてもらう。」

本人置いてけぼりで話が進みすぎている。

「あなたと、僕に憑いているとかいう神様の利害が一致しても僕は関係ないじゃないですか。助けてくれた事に関しては感謝していただきますけど僕は帰らせてもらいます。」

「へえ…。帰れるのか？」

「何言ってるんですか？僕にはちゃんと帰る場所がないんだろう？」

言葉に詰まる。彼女の眼が妖しく光る。怖い。恐い。強い。

「私は君よりも君の置かれている状況を理解している。安心しろ、利害は一致していると言っただろう？それにお前も含まれている。彼女は探し物、もとい探し人を見つけない。私も個人的理由からその人を見つけない。お前は居場所が欲しい。ほら誰も損しないだろう。」

「…彼女？」

必死に絞り出した言葉がこれだった。

「お前に憑いている神様だ。名前は自分で聞くといい。そうだな名前を忘れていた。私の名前は凜。代々この店を継ぐ者に与えられる名だ。お前の名は？」

深呼吸して落ち着け。落ち着いて考える。まだ分からない事だらけじゃないか。そして立っていたままだった事に気づき椅子に座りなおす。

「僕の名前は聖柄宴です。」

さつきより落ちつけた分余裕もできた。このまま営業スマイルもできそうだ。

「よく言えました、と言いたいところだが宴、今後一切この店と、信頼できる奴以外に本名は言っな。これは重要なことだ。」

「さつきから気になっていたんですが、あなた何者ですか？平気で神様の話しするし、やけに僕のこと知っているようですし。」

「ああいい忘れてたな。私は狐だ。」

「……………ワッツ？」

「それも九尾の狐だ。」

「……………ワッツ！？」

「えっへん」「

「いやいやいやいやなに可愛さアピールねらってますか！？そんなことよりあの九尾の狐！？妖怪の！？」

「やっと余裕が出てきたと思ったたらこのざまだ。…狙ってやがんのかこの人。」

「そう。それでいろいろ納得いくだろう？」

凜さんはクツクツク、と楽しげに笑っている。

いろいろ？…僕の事やけに知ってる事とか、狐の面をしてた事とか、そういえば倒れる前なぜか森に入ってた事とか、神様を彼女って言ってる事とか？

「実は君が気がつくまで彼女と話してたんだ。因みにこの面は正装ね。聖柄宴を本名と分かったのも、君にあつたごたごたを知っていたのも彼女から聞いていたから。彼女がなんで知っているかなんて聞くなよ？相手は神様で、それもおまえに憑いているんだからな。」

深呼吸パート二。この状況を整理して考える。押されっぱなしでは駄目だ。

「…全然納得できませんが百歩譲ってあなたが妖怪だとして、僕を殺す気はないようですよ、良しとします。他に納得いかないのがどうして迷ったかと、どうして僕に神様が憑いているのか、そして探し人とは誰なのか、なんですが…今僕は神隠し状態なんですか？」

「そうなるな。詳しいことは直接聞くといい。一応忠告だが、気軽な外に出るなよ？人間と見るや否や殺しにかかってくるかも知れんからな。」

「…肝に銘じておきます…。それで僕に憑いてるっていう神様にはどうやったら会えるんでしょうか？」

「夢の中で会えるだろ。まだ話さなきゃならん事は残ってるがまあおいおいだな。そろそろ彼女に会って来い。待ちかねているだろう。」

「僕が次の言葉を言おうとしたときには思考に靄がかかったようになり自然と瞼を閉じていた。最後に

「安心して寝ろ。布団には運んでおいてやる。」

と、やさしい声が聞こえた。

01 現状把握（後書き）

初投稿になります。至らぬ点多々あるかと思いますが温かい目で見ただけなら幸いです。

02 現状把握その2

眼をあけるとそこはさつき起きた和室ではなく、周りを高層ビルで隙間なく固められた公園のような場所に立っていた。公園のような、というのはブランコが一つだけポツンとあったからだ。他には彼女しかいない。蝶の柄の真つ赤な着物に下駄、身長はさほど高くなく、顔からは幼さが抜けきっていない。だがこちらを見て微笑む彼女からは凜さんとは違う母性のようなものが感じられる。髪は黒ではなく漆黑、きれいに肩のあたりで切りそろえられていて、純正日本人といって通るほど。そんな少女を背景に、高層ビルが立ち並ぶ姿はどうしようもなくシニールだ。

「お疲れ様でした。私からも説明しなければならんですが、まずは謝らなければなりませんね。」

そう言ってその少女はその場に平伏した。いわゆる土下座の状態だ。

「自分勝手な理由であなた様を巻き込んだ挙句、条件とはいえ勝手にあなた様の過去を凜様に話してしまいました。すべて自分の為にしたことです。本当に申し訳ありませんでした。」

土下座の状態ではきはきと喋るさまは、着ている衣服と相まってとても位の高い人だとわかる。

「顔を上げてください。仮にもあなたは神様なんでしょう？一般人に土下座なんてとんでもないですよ。別に僕は嫌だとは思っていませんから。」

「そうですか、では。」

「ゆっくりと立ち上がる。」

「そして訂正させていただくなら、正確には私は神様ではありません。神様代理です。」

「え？でも凜さんは神様って…まあそこらへんから説明してもらえますか？」

「はい。では自己紹介から、私は生と死とつかさどる神です。先代が正式な引き継ぎなしに居なくなってしまったので現在は代理ですが。」

「予想以上にすごい神様そうだな…生と死って…。ん？」

「先代ってどういうことですか？神様が死んじゃったりするんですか？」

「基本的に神は死にません。ですが生と死をつかさどる神は違います。生に関しての制約はないそうですが、死に関しては一つ命を奪うごとに自分の命も削られるそうです。それによって無限に生きることはできない為後釜を残しておくんです。まあ誰も殺さなければ無限に生きられるのにおかしな話です。自分が死ぬために誰かを殺した人もいたかもしれませんが、私が後釜だったんですけどいつの間にかあの人居なくなってたんですよ。もしあの人が既に死んでいたら問題なかったんですが、あの人もまだ生きてるんですよ。探してもらいたい人はその先代なんです。」

「どうしてその先代がまだ生きていると分かるんですか？」

「生と死の力は正式な儀式で何年もかけて継承するか、あるいは先代が死ぬ事で後釜がすぐに継承します。しかし私には正式な儀式で継承した生の力しかありません。つまりあの人はまだ生きてるんですよ。」

この代理様はあの人の、つまり先代をよくは思っていなかったようだ。それが会話ににじみ出ている。

「話を聞いている限りではその先代さんの事をあまりよく思っていないようです。」

「正直に言うと…そうですね。しょっちゅう居なくなっては何日も帰ってこないし、帰ってきたと思ったらなんか厄介事持ってくるし、あげく責任取るの私だし…。元はと言えば私をここに連れてきたときもそうでした。嫌だと言ったのに無理やり手を引っ張るし、最後には眠らされていつの間にかここにいたし…。」

なんかほとんど愚痴だなあ。そしてこの人たちは何でもかんでも眠らせるのか？それとも相手が人間だとそれくらいしかできないのか？あれ？

「そういえば気になってたんですけど、もしかしてもとは人間ですか？」

服装といい喋り方といい、位の高い武家屋敷の出身とか？最後らへんキャラ崩壊し始めてたけど。

「そうですね。というか私たちは皆もと人間らしいです。あの人がら教えてもらった数少ない情報ですね。」

もはや隠そうともしないな…キャラはこれで定着していいのか？

「ある程度情報がそろって来たところで聞きたいんですが、どうして僕を選んだんですか？」

今まで聞かなかったけどこれが一番重要だ。今後の為にも。

「それは…」

代理さんは目を伏せた。言葉を選んでいるようだ。そしてまた平伏する。

「人を選んでいる状況ではありませんでした。たまたま神林にいたから、です。私はまだ正式な神では無い為、こちら側ならいざ知らず、あちら側では神林を動くことはできません。その為神林にたまにたまたまあなた様に来ていただきました。」

「だからそんなことしないでくださいって。これからもそんなことでは僕の息が詰まります。」

「…はい。」

眼を伏せたまま立ち上がる。なんか本当よく躡けられてきたんだなあ。そんなことよりこれで自分の意思である森、森林だっけ、いや神林かな、に入ったのだと分かった。小さい事のように結構重要だったのだ。そして代理様のキャラもおおむね把握。

「僕はここに連れてこられたことをそこまで嫌だとは思っていません。なので気にしないでください。」

「…はい。」

依然として目を伏せたままだ。あれ？最初の時はあっさりだったのに今回はどうして？…ああそうか、冷静になって初対面の人に愚痴をこぼしたことを反省してるのか…。なんてよくできた子。神様だけ。代理だけ。

「ところでさっきの話しを思い返していて気づいたんですけど、先代さんはしょっちゅう居なくなつては何日も帰つてこなかったんですよ？…どうして今回は焦っているんですか？」

「実は痕跡が何もありません。今までは私が何もしなくても凜様や他の方たちがどこにいるのか教えてくれたり、見ていてくれたりしていたんですけど今回は何もなくて…。いつの間にか居なくなつていたらけれど、またいつもの様に誰か教えてくれるだろうと思っていれば誰も言うてこない。それで凜様に相談して管狐を使って探してくれましたけど痕跡すら見つけれなくて…。これはまずいという事になったわけです。居なくなつてから相当時間がたっていますし…。」

さっきまでは先代の事となると嫌みばかりだったのに、今回は打つて変わって心配性なお母さんの様だ。…居なくなつてその大事さに気づくって奴だな。…少し胸の奥がざわついた。

「そういう事ですか…。先代さんが心配なんですな。」

「いや、そういうことではなく…儀式も正式に終わっていませんし…それにまだ生きてるみたいですし…、えーとそれに…。」

視線をあちらこちらにせわしなく移しながら顔を赤くして必死に言葉を探す様は、まさに年相応のかわいさにあふれている。あー癒される。

「そっそんな事より他に聞きたいことはないんですか？それにその顔は気持ち悪いですよ？」

あう、不覚にもにやにやしてしまったようだ。でも必死に冷静を装う姿もかわいい。…また胸の奥ざわついた。

「そうですね…じゃこの空間はなんですか？」

「これは私が創ったものではなくあなた様が創ったものです。これが今のあなた様の心を表しているのですしょう」

高層ビルに周りを固められ、ブランコが一つしかない公園らしき場所。改めてよく観察すると高層ビルの一つ一つに自動ドアのようなものがある。近づいてみるも開く気配はない。

「それはあなた様自身が何かを隠しているのですしょう。きっかけがあれば開くかもしれませんね。」

隠している…僕が僕に何かを隠している…うまく考えられない。考えるのを拒否している様な感じだ。

「この空もその影響でしょう。」

空？真っ暗だ。何も無い。夜であるにしても星のひとつもない。そしてこの公園は夜の様な暗さではなく夕焼けを浴びている様な、どちらかというとまだ明るい。明るい場所と暗い場所の境目を探し

てみたが遠すぎて見えなかった。

「そろそろいいころ合いです。生活の比重の多くは凜様にお任せしているわけですし、これ以上は迷惑になりますね。」

「いやちよつと待っ」

有無を言わず、ここにきて三度目になる意識が遠くなる現象を感じた。

03 よつやく本格的に

「ん、んなあ!？」

「おう、やっと起きたか。」

あの変な空間から戻ってきたと思ったたら開幕凜さんが息もかかるほどの目の前に。驚いて飛び退く。また同じ布団に寝かされていたようだ。

「な、何してるんですか!？」

「いやー全く起きないしこれ以上寝て居られるといろいろ迷惑だしで、そろそろ強制的に起こそうかと思って。」

ここの人達は自己中心的すぎる!全く人の話を聞こうとせず話を進めすぎだ!…今更だがこれが日常になるとは前途多難だ…。そして凜さん?その固く握りしめた拳は何かな?あと数秒起きるのが遅かったらそれで殴るつもりだったのかな?僕は人間なんですよ?

「起きたならさっさと来い。説明説明で悪いが今度は店の説明だ。」

さっさと襖を開けて出ていく凜さんを慌てて追いかける。出るとそこは前の応接室ではなく縁側があり、その向こうには大きな日本庭園が広がっていた。

「見とれてないで早く来い。置いてくぞ。」

「あつ、はい。」

縁側を進んで入り組んだ道をどんどん通って行く。迷うと大変なのは見てわかる。慣れるまで大変そうだ。ふと視線を感じてあたりを見回してみたが壁、襖、襖、凜さん。

「さばんなよおまえらー。」

けだるそうな凜さんの声とともにバタバタと逃げていくような音がした。

「今のは？」

「お前はこんな大きな店一人でできると思ってんのか？働いてる奴がいるに決まってるだろ。」

それもそうか。そういえば代理さんが管狐がどうとかって言ってたっけ。あれが管狐とやらなのかな？

「もしかして全員狐だったり？」

「ご明察。」

という事は団結力高かったりするのかな？おんなじ狐の妖怪なんだし。

「着いたぞ。ここがカウンターだ。」

「それはいいんですけど…僕はここですか？まだ他の説明一切受けて無い上に、眠らされる前に、妖怪に殺されるかもしれんから外出

るなって言われた気がするんですが。外にいるのもここにいるのも妖怪に会うかもしれないという点では同じじゃないですか。」

眠らされる、のところを嫌味っぽく言ってみた。そもそもセリフ自体嫌味っぽかった。…不満がたまってるんだしようがないし、うがない。

「だってお前指導するまでもなく敬語だし、ちゃんとしてます付けてるし、他の仕事は慣れが必要だからすぐさまでできることしかないだろう?。」

嫌みは総スルーな上に凜さんお得意の不敵な笑み。何を言っても無駄そう。ここには横暴な人が多いようだし慣れるしかない。いざとなったら凜さんか他の狐が助けに来てくれるだろう。

「…そうですね。…というか今まで忘れてましたけど、代理さんは説明してくれなかったんですけど、どうして人間を連れてきたんですか?探すだけなら人間いらなんでしょう?。」

「代理さん?…ああ。それは私が焦っているあいつを落ち着かせようとして冗談言ったらそれを信じちゃって、制止する間もなく出ていっちゃったんだよ。」

はあ?

「その冗談って…。」

「そう。人間に頼んでみたらーみたいな感じで。忘れてたけどあいつって元人間だもん。妖怪だったら笑い話だったのに。」

ざけんな。

「つまり…。」

「まあぶつちやけ人間呼ぶ必要無かったんだよね。」

…はあ？…はあ！？別にいいとは言ったけど無理やり連れてこられて、その上帰れないとか言われて、さんざん横暴にも付き合っ

「てへ？」

「また可愛さアピールですか！？そんなんされても許しませんよ！？」

だがしかし、凜さんの顔立ちでならとても可愛い…だがしかし、いかんせん歳をとりすぎているような……代理さんなら可愛いだろうな…。

「という事でよろしく。」

妄想に走り始めた時を見計らってか声はすれど姿は見えぬ。ダッシュで近くの襦を開け放ったが凜さんの姿は無い。が、こちらの姿を見つけてびくっとう、となっている生物を発見。背は代理さんと同じくらいで凜さんとは模様の違う狐の面を付けている。なぜか甚平を着ている。

「あ、あの「キヤー！！」」

女性特有の高い声で叫ばれ硬直する。その子は向こう側の襦を開けて逃げに行った。律儀にも襦は閉めていった。追いかけてい気持

ちもあつたが、迷うとまずいのとカウンターを任されたのとであきらめることにした。あれがここで働いてる人？なのか。しぶしぶ力ウンターへと戻る。

「さあて、どうするかな。」

用意されていた椅子へと座り、玄関を眺めながら思案する。先代を探すにしてもどうすればいいんだ？管狐とやらでは痕跡も見つけられなかったと言っていたがはたして人間にどこまでできるのか。別に人間が必要だったわけではないし人間にしかできない事っていうわけでもないんだろっし。探して歩くっていつても妖怪に会うと危険だから外に出られない。つまり手詰まり。イコール人間必要なし。今更凜さんを恨んでもしょうがないし、もとい勝てないしなにか別に方法を考えなきゃいけないのか：人間にできることなんて限られるし力仕事にしても妖怪には大きく劣る。あれ？本格的に要らなくね？

一旦これは置いておいて別のことを考えよう。にしてもまだ情報不足だ。代理さんとはかく凜さんは嘘や秘密が得意そうだし大変そうだ。でも九尾の狐と生と死をつかさどる神様（代理）だから僕が考える必要なんてないのかな。

そういえばこの店の構造ってどうなってるんだ？やけに入り組んでるわ何もない部屋ばかりだわ何の店だよ。凜さんはよろづやっって言ってたけど、よろづやっつて確かなんでも屋だよな。…ますます分からん…。

「ごめんくださーい。」

「あっはい。」

気づいたら既に店の中に居た。

「人間が居るって聞いてきたんですけどー」

「えっ？」

忘れていた。妖怪に会えば、殺される。急いで立ち上がり逃げ出そうと後ろを向いたところで。

「お客さんにはちゃんと接客しなきゃだめでしょう？」

ドスンと腹に強い衝撃とともに腹から突き出る細い腕。ゆっくりと上にもたげて引き抜く。直後勢いよくまき散らされる臓物と吹き出る血、血、血。痛覚は一瞬で失われ、自分の血を見て噴水の様だと思えるほど。ああくそ、凜さんにもつと文句言つときゃよかつた。そうすれば死ぬこともなかつたかもしれないのに。流れ出る自分の血をポーッと眺めながら思う。

「帰り… たかつた… なあ…。」

それだけじゃない。役に立たないと分かっているでも先代を探す手伝いもしたかつた。自分の血から目をそらし、何気なく天井を見る。そこには僕を殺した妖怪では無く、凜さんが感情の無い目でじつとこちらを見下ろしていた。

「な…ん…で…。」

凜さんは何も言わずじつとこちらを見ているだけだ。妖怪は追いついたのか？なんで助けてくれないんだ。あんたのせいでこうなってるんだぞ。意識が遠くなる。無理もない。どう考えても生きていられる限界を超えた量の血が出ている。奇しくも四回目の意識の遠

くなる感覚は死ぬ感覚のようだ。凜さんへの疑問が頭を回りながら意識を落とした。

03 ようやく本格的に（後書き）

今更気がつきました。私は流血表現が苦手なようです。なんで残酷表現有りにしたし。：精進します。そしてなんか意識落ちて次話ばかりだな。もう少し考えてから書けて事なんですよね分かってます。でも書いてると楽しくなっちゃっつんですよ。あっ、ちゃんと次ありますよ。説明回ばかりなのでそろそろ話を進展させたいです（脱線する可能性大）。

04 ひじりん

「ん、んなぁ!？」

「おう、やっと起きたか。」

起きたと思ったら開幕凜さんが息もかかるほどの目の前に。驚いて飛び退く。同じ布団に寝かされていたようだ。…なんかデジャヴ。

「な、何してるんですか!?!というかこんな展開以前にもありませんでしたっけ？」

「あつたぞ。ちゃあんと生きてるから安心しろ。」

「生きてる?...そういえば...」

凜さんに無理やりカウンターに座らされこれからの事考えてたら誰かが店に入ってきて、それで、殺された。殺された。殺された。臓物をまき散らし、血を噴き出して、完膚なきまでに、死んだ、はず。急いで体に異常がないか確認する。

「安心しろ。お前はきちんと生命活動してる。」

「でも死ぬ感覚?みたいなのが覚えているんですけど...。」

「やれやれだな。お前はもう少し頭のできた奴だと思っていたんだがな。」

その言葉に少しいらだちを覚えた。

「そういえば凜さん、あの時あの場に居たのに助けようともしませんでしたよね？人間は必要ないから死んでも構わないって思ったんですか？」

敵意丸出しだ。隠す気など毛頭ない。凜さんは一つため息をつき、そして僕の頭を鷲掴みにして視線を無理やり合わせる。あの目だ。最初に応接室で正面に対峙した時と同じ目だ。

「いい加減私を信用しろ。お前の衣食住を受け持つるのは私だぞ？それに人員は一人でも多い方がいいに決まってるだろうが。もう少し頭を使えよ人間。考えたら分かることだ。」

「考えたら分かる…。」

これ以上何を考えろというんだ。この様子だと助けしてくれたのは凜さんではない。他に助けしてくれそうなのは、代理さん…。そうか代理さんか！代理とはいえ神様、その上生と死をつかさどっている。死の能力は無いと言っていたが生はあるじゃないか。

「…代理さん…ですか？」

「遅いな。遅すぎるな。だが正解だ。」

やっと手を離してもらえた。改めて顔を見ると怒っているというよりは、むしろいつも通りの笑みを浮かべていた。

「これは確認だったんだ。お前はちゃんと死なないのかどうかのな。まあこの場合は死ねないだが。それで彼に頼んだわけだ。」

「彼？」

「どうも。そろそろ俺は必要ないんじゃないかなーなんて思い始めてたところですよ凜さん。」

彼はずっとこの部屋にいたのか腕を組みこちらをじっと見つめている。服装は上から下まで真っ黒なのに髪だけが病的なまでに真っ白。少し垂れ目でやわらかい物腰をしている。今まで気づかなかつたのは凜さんが死角になっていたからのようだ。…わざとしたな？

「そんなことは無いぞ猫又。お前はここでのキーマンだからな。ほれ自己紹介しろ。」

「へいへい。どうも猫又です。今回ひじりんの殺害依頼を受けました。以後お見知り置きを。」

頭だけで会釈する。がそんなことはどうでもいい。殺害依頼ってところも死なないと分かったからこの際どうでもいい。ただひじりんってなんだ。ひじりんってなんだ！キツと凜さんを睨む。

「お前の言いたいことは分かるがまあ落ち着け。残念ながら猫又は信用できる相手では無いのが事実だ。彼も私と同じよろづ屋をしている。つまり、お前を狙っている奴から依頼を受ける可能性は高いよって本名を教えるわけにはいかない。」

「その通りだひじりん。今はまだ味方でいられるが依頼を受けた以上はそれに従うことになる。」

…だからってひじりんって…なんか萌えキャラっぽいし…。

「因みにこの名前を考えたのは…？」

「無論私だ。」

凜さんが胸を張る。だから可愛くないって。おーけい。もうどうでもいいや。大きな脱力感。

「終わりならもう帰ってもいいか？」

猫又が手を上げる。

「そうだな、ありがとう。」

「じゃあ帰るけど。」

襖を開けたところで立ち止まる。

「一応忠告だが、吸血鬼に狙われることになるだろうから気をつけるよ。」

「え？」

「分かってるぞ。」

「そっか。まあ頑張れよ。」

それを最後に出ていってしまった。また僕だけ置いてけぼりみただった。

「あの…凜さん？」

「自分で考える。」

やっぱりか。

「いやそつじゃなく、前々から気になってたんですけどこの部屋何ですか？」

凜さんはきよとんとした顔になった。

「霊文室。」

「……………」

04 ひじりん（後書き）

またもや予想よりも長くなり書きたいところまで書けませんでした。

ようやく主人公に定番の不死という付加価値ができました。これぐらいないとたぶん主人公はすぐ死んでエンディングになりますので勘弁してください。

05 ゴキブリホイホイ

その後凜さんに起こされ即刻またカウンターへ。その途中で聞いてみた。

「なんでまたカウンターなんですか？それより痛覚あるとはいえ死なないんですし外を見てみたいんですけど。」

「もう少し待ってる。猫又が案内してくれるから。今あいつにはお前の噂を流してもらってるから戻ってきたらな。」

「そんなことしたら此処にたくさん妖怪が来るんじゃないですか？」

「もちろんそれが狙いだ。集めて情報収集する。此処に私が居る限り並大抵の奴なら大きく動けないし、なにより自分で動くよりむしろから来てくれた方が助かる。」

それで見つかりやすいようにカウンターというわけか。

「猫又さんが噂を流している間に他の奴が契約して裏切る可能性もあると思いますけど。」

「あいつとの契約は三つ。」

指を三本立てる。

「一、お前を殺す。これは終わり。二、お前がこの世界で一人で動ける程度に情報を与える。三、お前を鍛える。この三つは契約してるから必ず守る。他は知らん。」

「三つ目の意味は？」

「そのまんまだ。お前を鍛えてもらう。私は立場上此処から動けない。故にお前には基本的に一人で動いてもらうことになる。そうしないと力が必要だろう？」

これから大変そうだなあ、と遠い目。

「ということで頑張ってくれたまえ囃君。」

「うーい。」

僕はカウンターにある席に向う。まだ血の匂いが消えていない。必然、あの時の光景が頭をよぎり胸から込み上げてくるものを必死に抑えた。これが日常になるのだ。慣れる。慣れるしかない。一つ深呼吸し席に座る。落ち着いてあたりを見回すともう凜さんはいない。

「お前が噂の人間か？この血の匂い…お前だな？」

さっそく来たよ。猫又さんが出て行ったのはついさっきだぞ。外見は小さな鬼の様で頭に一本角が生えている。内心もう恐怖は微塵もなく、この場をどう対処するか冷静に考え始めていた。とりあえず話しかけよう。そして実行。

「つつ！？」

しようとしたらなんか逃げてった。そして凜さんに捕獲されてた。

「一人目捕獲完了。」

そう言っただけで獲物を持ってきた。とてもいい笑顔だった。その眼はどうだ言った通りだろう、と言っている。捕まった奴は、ごめんなさい離してください、とか言ってる。笑顔で奥に歩いていく凧さんの後ろ姿を合掌で見送った。そしてため息一つ。

「何だこれ。」

その後も何匹もやってきてはすぐに凧さんに捕獲されていった。そのたびにいい笑顔で獲物を持ってくるのでむしろそっちが怖かったがゴキブリホイホイにゴキブリが入っていた時の主婦の様な感じだろうかと思うと笑えてきた。来る奴みんなに憐れみの眼差しを向け始めていた頃、猫又さんが戻ってきた。

「やあ。もういいだろうと思ってね。結果はどうだい？」

「もうゴキブリホイホイ状態ですよ。あるいは撒き餌とか。」

「それは凧さんも大喜びだろう。それでなんだけど。」

「？なんですか？」

眼がキラリと光る。あつこれは…、と思った時には胸に細い腕が刺さっていた。血が口に込み上げごぼごぼと鳴る。尿も垂れ流され血と合わさり気持ちの悪い匂いが鼻につく。前の時は痛覚が飛んでくれたのに今回はいくらたつても無くならない。なんかデジャヴ…ついさつきもこんな感じで細い腕が僕の体を貫通していたんだよなあの時は背中だったからよかったが今回は相手の、猫又さんの顔が見える。自分を殺そうとしている相手の顔を見るのはあまり気分が

よくない。自分の中で永遠と思える何秒かの後に猫又さんが口を開いた。

「予想はしてたんだよね。死なないって広めたらやばいのが来るから言えなかつたんだけど。痛覚はあるみたいだし申し訳ないと思うけどこつちも仕事だから勘弁してね。でもすごい生命力だよ。まさか心臓を盗つてもまだ息があるんとは思わなかつたよ。潰さないと死なないのかな。」

腕を引き抜く。支えを失った体は力なく倒れる。猫又さんを見ると手には心臓だと思われるものを持っている。なぜかまだ微弱に拍動している。あれが止まると意識がなくなって、気づけばまた生き返るのか…。だてに神様（代理）じゃないんだよな。

「悪いね。」

それは僕に向けてではなく、部屋の奥に向けてだった。

「いや、気にするな。」

奥から声が応えた。猫又さんはニヒルに笑い出て行った。奥からビチャツ、ビチャツと血と尿が混ざったものを踏む音が聞こえる。なんでくるんですか。汚いじゃないですか。ちゃんと僕が掃除しておきますから。口に出そうとしても声が出ない。頭を持ち上げて膝に乗せられ凜さんが優しく見下ろしていた。こんな膝枕は嫌だなあ。

「あーあ、また霊安室行きだな。まったく掃除する身にもなれよ。」

「…すいま…せん…。」

やっとこれだけ言えた。

「まったくだ。やっぱりお前には力が圧倒的に足りないな。これから強くなってもらわないと。まあ今は安心して寝ればいい。」

「…はい…、毎度…毎度…すみま…せん…。」

「気にするな。」

これから強くなって、一人で自由に動けるようになって、凜さんや代理さんに迷惑かけないようにして、先代を見つけて、それで、どうしよう？先代さんを見つけたら、どうすればいいんだろう？まあ今は考える必要のない事か。

06 訓練

眼を開ける。いつも通りの部屋。体に異常が無いか確認し立ち上がる。さすがにもう大丈夫だと判断されたのか凜さんはいない。とりあえずカウンターへ行ってみよう。襖を開け入り組んだ道を歩く。途中で狐を見つけたので手を振ってみると逃げられた。まだ慣れるのに時間が必要なようだ。カウンターにつくとキセル片手の凜さんと猫又がいた。

「やあ。相変わらず元気そうで何より。」

「…どうも。」

「そんな警戒しないでよ。仕事なんだしさ。それに警戒する相手の間違えてるよ。俺は契約には忠実だしね。」

「警戒も何も二回も殺されれば誰でもこっぴどくなりますよ。」

「そうなのか、同じ奴を二回も殺した事がこれまで無かったから知らなかったよ。」

しれっとそんな事を言う。むかついたが勝てないので黙っておく。

「起きてきたところで話を進めるが、とりあえず頼むな猫又。私はまだやる事が残ってる。」

凜さんはそう言って店の外へ出て行ってしまった。

「ああ。任せろ。」

「いや何がですか？僕は今ここに来たばかりなんですけど。」

猫又は懐から布に包まれた物を取り出しこちらに投げてよこす。いきなりだったのと予想外に重く少しよろける。

「開けてみる。」

そう言うので包みを開ける。中には均等大きさの短刀が三本入っていた。両刃で鞘はない。

「これは？」

「基本メイン一本サブ二本。これからの成長によっては追加を考えてやる。」

猫又は質問を無視し店の外へ出て行く。短刀を包みのまま抱えて慌てて追いかける。庭の方へ周り、真ん中辺りで立ち止まり振り返る。

「定番で悪いけど、それで俺に傷をつけてみる。」

これが鍛えるってやつか。恨みをぶつける相手を間違えているのは分かっているが、これまでのストレスで乗り気になってしまっ自分分がいた。

「…分かりました。」

包みの中から一本取り出し他の二本を包みのまま下へ置く。右手に持ち左手の親指の平へ軽く当てると簡単に皮膚を切り裂き血が出

てきた。痛みはあるし血も出ているから模造刀ではない本物だ。それも切れ味が抜群に良い。何度か素振りをして体に馴染ませる。猫又との距離は三メートルから四メートルほどか。そしてゆっくりと正眼へ構える。

「準備はいい？」

「は…っ！」

い。と言えなかった。いわせる気が無かった。口を開く瞬間にはもう動き出していた。超低空姿勢からの回し蹴り。僕を二回も殺した時と同じ動き。今回は距離があったのと三回目だったので思考が追いついたが避けるにはもう遅く腕を前でクロスさせる。それでも衝撃を殺しきれず蹴り飛ばされ倒れた。すぐさま起き上がり敵を確認、するには体が追いつかず起き上がる前に右手の短刀を蹴り飛ばされた。

「動きを見れたのなら防御ではなく回避を優先しろ。最悪防御することになっても衝撃を逃がすようにしろ。今の場面は自分で後ろに飛ぶ事ができたはずだ。」

「そんなこと言われても体がついてこないですよ。」

「無意識で避けられる様にならなきゃだめだ。ほらさっさと立てよ。続きだ。」

手を貸す気はない様なのでまだしびれる両腕を酷使して立ち上がり短刀を拾い、また正眼へ構える。

猫又との距離は心なしかさっきよりも短い。

「その構えもそうだが、一本だけじゃなくていい。できるなら二本使ったっていい。自分にあった形を模索しろ。」

「そうですね。でも今はこのままで。」

「そうか。」

深呼吸し相手の全体をみる。そして高速で動く。今度はきちんと知覚できる。またさつきと同じ下段だ。正眼の構えから右足を引きそのまま素早く切っ先を下へ。タイミングは合っている。突き出された右腕を身をよじりかわしながら斜めに切り裂く、と思った。だが現実には腕を切り裂くどころか空を切り、あげくスピードを乗せた回し蹴りがメギツという嫌な音を立てて右肩へと当たり吹き飛ばされる。

「ぐう…なんで…」

「動きは見えていたようだけど焦りすぎだ。それに頭で考えているから柔軟に対応できていない。その様子だとどうして避けられたのか分かっていないだろう。今俺はタイミングを合わせられたからそれをずらしてやっただけだ。よし、次だ。」

次だ、と言われても今の蹴りで間違いなく右肩は折れただろう。

右腕の感覚はもうなく動かせない。

「なにを呆けている。左手があるだろう。」

ここまで来たらもうどうにでもなれだ。左手に短刀を持ち替え何度か握り馴染ませる。利き手では無いのでうまく動かせないだろうがもう気にしない。猫又はさつきよりも近い。

「ほらほら早くしろ。どうせ死なないんだし多少無茶しても大丈夫だろ。」

「そうですね。どうせ死なないですし。」

「それはもっと無茶苦茶してもいいという意味か？」

「いえ勘弁してください」

その後二人で嘔き出してしまった。これで時間稼げたらいいなという淡い期待もあったが残念ながら終わらせてくれなかった。その後凜さんが帰って来るまで続き、結果右肩と肋骨三本、左親指の骨折で終了となった。最終的に猫又との距離は一メートルほどにまで短くなっていた。反応速度は上がったはずだし、左手も動くようになった。代償は自分の事を考えると無いに等しいだろう。因みに今回は傷どころか当てることすらできなかった。今後に期待、とだけ言って猫又は帰って行った。ニヒルな笑顔を張り付けて。

「おおおう手酷くやられたな。まあ死ななかつただけですか。」

「そうですね。こんなぼろぼろですけど。」

そうおどけて見せる。凜さんは気持ちの悪い笑みを浮かべている。

「そういえばさあ、その傷どうやって治るんだろうなあ。」

「さあ？いつも起きたら治ってますし。」

なんか悪寒が。

「そうかそうか。ところでさあ、今時間とかお金とか余裕ないんだよねえ。」

「はあ、そうですね。では僕は帰って寝させてもらいます。」

何が言いたいのか分かった。故に逃げなければ。

「どこに帰るか分かってるのか？」

うわあ……。微笑みが怖いよ……。恐怖だよ……。

「…霊安室…でしたっけ？」

「言いたい事は分かるな？」

「分かりません！」

ダッシュで逃げる、がすぐに捕まる。

「すまないと思ってるよ。」

わざとらしくヨヨヨと泣く真似をする。あきらめた方がいいか……。次に起きた時はまた布団の上か。

07 訓練その2

眼を開ける。いつも通りの部屋だ。さすがに慣れたのですぐに立ち上がり部屋を出る。もちろん帯刀済みだ。目的地はいつも通りのカウンターだ。何度も通った道なので足取りは軽い。途中で前方から狐が歩いてきた。いつも会う狐とはまったく違う雰囲気を感じる。何より面の模様が明らかに違う。品の良い物腰から代理さんと同じものを感じた。背丈は僕の一回り下ぐらいだが面のせいか妙な威圧感を醸し出している。

「あら。はじめましてひじりんさん。」

思わず苦虫をかみつぶしたような顔になった。

「そんな顔しないでくださいよひじりんさん。凜様からそう教えられたんですから。不可抗力ですよひじりんさん。」

「そんな何度も何度もひじりんって呼ばないでくださいよ。あんまり気にいってないんですから。」

「そうですね。でもこちらも凜様からそう呼ぶように言われているので私の一存で変えることはできませんひじりんさん。」

「…分かりました。もういいです。」

「この子はSだな間違いない。諦めて横を通りすぎる。」

「凜様がカウンターでお待ちですひじりんさん。」

「うーっす。」

後ろからの声に歩きながら応える。あの子とはなんだかんだでいい話相手になってくれそうだなあと思った。カウンターに着くといつも通りキセル片手の凧さんとニヒルな笑みを浮かべた猫又が話している。

「おっきたか。じゃあ猫又よろしくな。」

僕の姿を認めると凧さんはまた出て行ってしまった。…最近凧さんとまともに話をしてない気がするぞ。それをいったら代理さんとも会ってないな。

「じゃあ行くか。ついて来いよ。」

黙って頷き後について行った。昨日と同じ庭だ。

「昨日はこの距離ぐらいだったっけか。」

約一メートルほど。半歩踏み出せば相手に届く距離だ。今回は左手に一本を正眼に構えて右手を開けた。何度か握ったり離したりを繰り返し指をならす。

「準備はいいか？」

前回応えたら不意を突かれたので今回は黙って相手の顔を睨みつけて集中する。

「…そうかい。」

猫又がふつと構えを解いた瞬間を見逃さない。右足を踏み出し切つ先を突き出す。狙いはわき腹だ。右手は振りかぶり第二撃まで作った。が、それと同時に猫又はバックステップして右足を振り上げた。狙いは短刀ではなく顎だ。ぎりぎり顔をそらし避けるが第二撃である回し蹴りはもう避けられない範囲までできてしまっている。フリーである右腕でガードしそのまま左手を突き出せばイケる。勝った。

ゴキユツつという生理的嫌悪感のある音が響き右腕に激痛が走る。大丈夫だ踏みとどまれる。そのまま切つ先を喉元へ突き出す。眼と眼があつた。猫又は、張り付けている笑みではなく、本当に楽しそうな笑みを浮かべていた。猫又は首だけで避け、今度は顎めがけて左足が飛んでくるのをバックステップで避け間をとった。ありがたい事に追撃は無い。

「ねえひじりん。俺は傷をつけるって言ったんだよ？何も殺せって言ってるんじゃない。やろうと思えばできただろ。」

「そうでしたっけ？忘れてましたよ。」

「へえーそうかい。面白いじゃないか。」

「そりゃどうも。」

「だがまだ俺を殺すには足りないな。自分流のスタイルを確立しろ。まだまだお粗末だ。試しに投げナイフでも調達してこようか。おまえには一刻も早く成長してもらわねばならんしな。」

「そうですね。これを投げるにはさすがにつらいですし。でもそれなら弓とか拳銃とかの方がよくないですか？」

「拳銃は此処にはない。弓ならあるが、俺や凜さんレベルになるとそんなもんはおもちゃにしか見えんな。あんな大きな物持ってたら機動力が下がる上に格好の的だ。」

「そりゃそうですけど。」

「というかお前はまずその打たれ弱さを何とかするべきだよな。一発食らったらアウトはさすがにひどいぞ。」

「それはあなたが強いからですよ。」

「知ってるさ。」

自分で認めやがった。

「なんたつてこの世界を個人で生きていけてるんだからな。大抵は群れるか媚びるかだ。まあ龍クラスになると話は別だがな。」

「えっ？龍？龍がいるんですか？」

最早なんでもありなのか。

「もちろんだ。あいつらは普段は山の奥深くとかにいて滅多に姿を現さない。なぜならあいつらは頭がすこぶる良いからだ。低俗な輩と一緒に居たくないんだと。普通の妖怪が会いに行けば即殺されるかだろうぜ。」

それは怖い事で。というか猫又ってここまで自信過剰だったのか。確かに強いけども。間違いなく折れている右腕が実はものすごく痛いだけだ。

「ふむ。一度知り合いの龍の所へ連れて行ってみるのも楽しそうだな。それなら俺の負担も減るし。」

なんか怖い事言い始めたぞ。喰われても生き返られるのかなあ…心配だなあ。

「そうと決まったら明日行く事にするか。」

なんか勝手に決定事項にされてる。

「じゃあそついう事で。」

気を抜いていたとはいえ動きは見えた。何度も見た腕を突き出し腹を穿つあの動き。咄嗟に思いつきり左に飛ぶ。わき腹をかすめ真っ赤な血がにじみ出る。

「なんだ。ちゃんと避けれるじゃないか。」

猫又は笑っている。急いでバックステップで間を取ろうとするが猫又は待ってくれなかった。さっきまでのおふざけとは違う明らか殺意を持った動き。もう反撃する余裕もなく避けることしかできない。それも完全ではなくところどころ切り傷を作っていく。そしてふっと足の力が緩み体制を崩してしまった。しまった、と思うにはもう遅い。

「ぐふっ…。」

もう何度目だろうと同じ人に同じ場所を穿たれた。今度はすぐに引き抜かれその場に崩れ落ちる。おぼろげに猫又を見ると店の方を向

いて何か言っているようだ。するとすぐに今日出会った狐が出てきた。ゆっくりと僕に近づいてくる。それになぜか安心し、僕はまた眠りについた。代理さんに籠に喰われても大丈夫なのか聞かないとな。

08 叱咤と叱咤と知った？

目を開ける。そこは見慣れた天井ではなく、周りを高層ビルに囲まれた公園。そこにブランコに乗って遊んでいる少女が一人。

「お久しぶりってほどでもないですけどとりあえずお久しぶりです代理さん。」

「そうですね。お久しぶりですひじりんさん。」

「…それをどこで？」

「凜様がそう呼べと。」

僕は心の中で凜さんに怒った。何してくれてんだあの人は。嫌がらせか嫌がらせだる間違いなく嫌がらせだ。次会った時にガツンと言ってやらねばなるまい。しかし言う勇気が無いので速攻で考えなおした。いつの間に僕はこんなに弱くなってしまったのだろう。

「もしかして嫌でしたか？」

「ええまあ。勘弁してほしいなど。」

「ではなんと呼んだらいいですか？」

「宴お兄ちゃんです。」

即答だった。脊髄反射だった。

「分かりました宴お兄ちゃん。」

刹那、体を衝撃が駆け抜けた。こんなに純粹で幼くてかわいい（年齢は気にしない）女の子にお兄ちゃんと呼ばせてしまった罪悪感と、それを補って余りある興奮。これはハマる。今なら二次元しか愛せないっていう人の気持ち理解できる気がした。

「それで本題ですが。」

ぴょんつとブランコから降りてこつちを向く。

「あなたは無残に死にすぎです。」

ぐさり。僕の心に会心の一撃。さっきまでの何とも言えない心地よい気分から一転、テンションが地に落ちる。これはさながら蜘蛛の糸だな。

「えー」と。僕って体は人間なわけですし猫又とか凧さんとかハイエンドクラスばっかり周りにいるわけですし……。」

代理さんはため息をひとつ。

「宴お兄ちゃん、死なないって事に甘えていませんか？」

僕は何も言い返せなかった。

「本来神以外は死ぬようにプログラミングされているんですよ？生きて死ぬは同義です。生きている限りは死ななければならぬ。それが当然で絶対。避けられない決定事項です。それを宴お兄ちゃんは神の力を“貸してもらって”いるだけなんですよ？そこを勘違

いされては困ります。本来宴お兄ちゃんはこの世界ではなんの力も持たない最弱なんです。ちゃんと噛み砕いて、反芻して、理解して下さい。」

ここまで言われても何も反論出来なかった。事実僕は死なない事に優越感を覚え、死なないことを自分だけの特権がごとく思っていた。

「そうか。僕は甘えていたのか。」

不思議と笑みが零れた。

「その通りです。だからあんな簡単に死ねるんですよ。宴お兄ちゃんからは生きようという意志が感じられない。」

「それを言うただけに僕はここに呼ばれたの？」

「そうです。凜様は今先代を見つけるために動いてくれます。あなたには一刻も早く凜様と一緒に動けるようになってもらわなければなりません。」

「そうか…そうですよね。凜さんの隣を歩けるようになるためにも早く強くないとですよね。」

「今回はこれでおしまいです。さようなら。」

代理さんはぺこりと頭を下げた。僕は土下座をした。

「今までごめんなさい。僕これから頑張るから、必死に頑張るから、代理さんは僕の心オアシスでいてください。」

代理さんはクスツと笑って、任せてください、と言った。

意識が覚醒する。いつも通りの天井。いつも通りの霊安室。いつもと違う心境。立ち上がった外に出る。目的地も相変わらざるカウンター。そろそろこの店を自由に歩き回れるようになりたい。道中、何人が狐にあった。もう慣れてくれたのか僕に会釈をしてくれた。何故かとても嬉しくなった。カウンターにつくと誰もいなかった。あれ？猫又が龍に会いに行くとか言ってたっけ。ふとカウンターの上の紙が目についた。なにやら達筆な字で文字が書いてある。

仕事が入ってしまったので今日の予定は無しってことで。猫又

と、書いていた。今日こそ死なないように頑張ろうと思っていたのに出鼻をくじかれた。僕はため息をついてカウンターの席に座る。今日はどうしようかな？凧さんはどこ行ったんだらう。そういえば最近凧さんと話をしてないな。なんだかんだ言っても僕は凧さんが好きなんだなあ。そうやってポーっと思考をしていたら店のドアが開いて黒のスーツに黒の初老の男性が入ってきた。猫又の件があるので僕は警戒して相手に見えないように短刀を握り締める。

「こんにちは。ひじりん様。」

シリアスなのでスルー

「いらっしやいませ。僕に何か用でしょうか？」

必死に営業スマイルを作る。自分でも分かるくらいぎこちない。

「そんなに警戒しないでいただきたい。なにも襲いに来たわけじゃありません。まあ今回はですが。」

初老の男性はいやらしく笑みを作る。

「それで何の用ですか？」

もうイライラを隠さない。いや、ここで熱くなるのはまずい。落ち着け。

「今回は招待状をお持ちしました。ひじりん様にぜひ来ていただきたい。」

「わざわざ罫にかかりに行くほど僕はバカじゃないんです。おかけりください。」

「本当にいいんですか？来ていただけたらあの森の神様の情報を提供して差し上げますよ？」

「!?!?それは本当ですか？」

「もちろんです。来ていただけたら今すぐにでも。」

「…分かりました。それで、僕はどこに連れて行かれるんですか？」

相変わらず僕はお人よしなのだった。

「我が主である吸血鬼の館、紅黒館です。」

…なんて厨二くさいんだ。

08 叱咤と叱咤と知った？（後書き）

数少ないこの拙い文章を読んでくださっている方々へ。最近忙しいのでほとんど更新出来ないとありますが一か月は空けないように善処いたしますのでどうかよろしく願います。

09 吸血鬼と凜さん、僕と狼男

見慣れない道を黒スーツの男の後ろにくっついて歩く。店を出たのが数分前なのに全く知らない未知の世界が広がっていた。自分の想像していたよりもファンタジーな感じのしない、自分のいた世界と同じような感覚、でも向けられる興味の眼差しプラス敵意の眼差し。前の男は周囲の眼差しなど気にしないよう歩みの速度を店を出たときから変えることなくただ淡々と歩いていった。因みに僕はいつ襲われるか気が気でなく、常に懐の短刀を握りしめていた。

「そんなに気を張らなくても大丈夫ですよ。どうせ襲ってなんてきませんから。」

「たどえそうだとしても用心に越したことはありませんから。」

「そうですか。でもいざという時に疲れていてはどうすることもできませんよ。」

「お気になさらず。」

僕はもう死ぬわけにはいかない。意気込んだ手前簡単に死ぬわけにはいかないのだ。

「では後一時間ほど歩きますので。」

簡単に死ぬわけにはいかないのだ！

結局一時間休憩無しで歩きとおした。黒スーツの男は全く歩くペースを落としてくれないのもものすごく疲れた。途中何度か短刀が

ら手を離し、手の汗を拭ったりしている、そのたびに「おやおや警戒しないでいいのですか？」なんて聞いてくるもんだから僕は押し黙って黒い背中を睨みつける事しかできなかった。なんで後ろ見ないで分かるんだよ。

「着きましたよ。」

そう言われて館を見上げてみた。色は赤黒い、というか血のような赤と吸い込まれるような黒。長い間見ていたく無い色だ。中に入っても同じ配色。これは早めに話を切り上げて帰らなければなるまい。通された部屋は貴族の家によくあるような（偏見）食事をとるところであるう部屋。今はテーブルクロスと蝋燭だけで皿はない。僕はその端に座らされた。すると向かいの扉がゆっくりと開き、この館の色に似合わない上から下まで真っ白な服を着た若い男性が入ってきた。

「やあやあようこそようこそ。噂のひじりくん。会いたかったよ。」

その男性は向かいに座る。

「君とは一度面と向かって話してみたかったんだ。君の血はとてもおいしかったからね。」

男性の目がギラリと光る。凜さんや猫又のようなハイエンドクラス特有の目つき。というか血？こいつはいつ僕を？ああそうか。こいつが猫又の複数いる雇い人か。

「君の血はそう、憎悪。純粹な憎悪。こんなにも上質な物は君が初めてだったよ。いやーおいしかったな。周りが憎くて恨めしくて、

幸せそうな人間が大嫌いで、自分がこんなにも惨めなのは親のせいだと呪って、こんな自分に優しくしてくれる人間がひどく不快で、こう思ってしまうのも惨めで。結局逃げ続けて他人のせいにし続けて、今でさえこんな状況にした周りの奴らもみんな憎くて」

「それは違います。」

これ以上黙ってなんていられない。大丈夫頭は冷えている。

「何が違っつて言っんだ？お前はもともとそういつ奴だろうっ？」

「僕は凜さんや代理さんや猫又や店の狐たちが大好きです。これは嘘じゃありません。」

「無理をするな。お前はそうやって一度逃げたんだろう。二度目だつて同じだ。何も変わらない。根本なんてそう変わるもんじゃない。」

「確かに僕は一度逃げました。でも僕は同じ失敗を繰り返さない。僕はここでみんなに感謝して生きていく。」

「無理だな。いい加減楽になれよ。こっちに来いよ。ここの方がお前にとつては暮らしやすいぜ。」

「残念ですけど、かわいい女の子のいないここでは暮らす気はありませんね。吸血鬼さん、あなたには僕を閉じ込めてなんておけませんよ。」

「ふむん。まあいいか。顔見せてことで。こっち側に来なくなつたらいつでも言っつてよね。」

「そんなことはありませんね。」

「ははっ。そっか。ああそうそう忘れてた。あの神様のことだけだね。」

ああ元はと言えばそれのために来たんだっただ。

「ごめんね。実はなーんにも知らないんだ。」

…まあそんなもんだよな。それを分かっているながら来たようなんだし。

「でしようね。」

僕はため息をついて立ち上がる。無論この館から出るためだ。

「ちよっと待って。もうすぐしたら来るから。」

「え？何がですか？」

男性改め吸血鬼はにこにこしたまま何も話そうとしない。僕はとりあえず座ってみた。

「狼。あとどれくらいかな？」

「もういらっしやるかと。」

気づけばそこにさっきの黒スーツの男。狼男ってわけか。

突如きーんという音が聞こえた。それと共に爆裂音をたてて目の前の壁がぶち壊れた。瓦礫が所せましと飛んでくる。僕は咄嗟にテーブルの下に隠れてやり過ごした。眼の端に見えた吸血鬼はにやにやしたまま動こうとしていなかった。静かになったところで顔を出す。目の前に大きな穴が出来上がっており、その近くに佇む人影がひとつ。

「やあやあようこそようこそ。来ると思ってたよ。予想よりちょっと遅かったかな。何かあったのかい？」

「いやいや最近何かと忙しくてねえ。でも安心しろよ、手加減はないからな。」

「そうかそうかうれしいなあ。」

額に青筋浮かべた凜さんと、無邪気に笑う吸血鬼と、後ろの大穴を眺めて面倒くさそうにため息をついている狼男と、状況をうまく把握できずに戸惑う人間の姿がそこにはあった。なにこれすごく逃げ出したい。

「あーそこにいたかひじりん。華麗に助け出してやるから安心しろよ。」

目だけはしっかりと吸血鬼を睨みつけながら話す。これはバトル展開間違いないだな。これは助け出される前に死ぬかもしれない。

「今はそんなの相手にしないでよ。こっちだけを見つめてはーと。」

「うるさい黙れうっとおしい。すぐに相手してやるからこっちはこい

よ。」

凜さんと吸血鬼のキャラが一瞬にして崩壊。いや凜さんはあんな感じだっけ？とにかくバトル展開だけは阻止せねば。

「凜さん。僕は大丈夫もが」

途中で狼男に口を塞がれた。ああまずい。この体制は凜さんから見ると助けを求めたけれど拘束された弱い人質にしか見えない。凜さんの顔が目に見えて険しくなった。

「少し静かにしてください。」

静かにしてたらバトル展開になるだろうが！

「外行こーよ。勝ったら返してあげるよ。」

「おーしいいぜ。もとよりそのつもりだ。」

凜さんと吸血鬼は凜さんが開けた大穴から外へ飛び出していった。そしてやっと拘束から解かれた。

「あなたが止めたせいでひどいことになったじゃないですか。」

「これでいいんですよ。あなたを呼んだ理由の一つに凜さまが来るから。というのがあったんですから」

「つまり？」

「あなたは凜さまを呼ぶ餌なわけですね。」

「…。」

「そんな顔しないで下さいよ。こっちだってこの大穴を直すことを考えると嫌になるんですから。」

「…あなたも大変なんですね。」

「そうですね。さあ、あのお二方が帰ってくるまで時間があるでしょうし何かお飲み物でもお持ちしましょう。」

なんか友情が芽生えた気がしたが気のせいか。嗚呼あの二人はいつ帰ってくるのだろう。あまり遅くならないといいなあ。

010 休息なんてあるわけない

暇な時間ほど苦痛なものはない。暇は人を腐らせ、墮落させ、中毒にさせる。それを分かった上での暇というのはいつそ死んでしまおうかと考えてしまうほどに憎くて恨めしいものだ。今僕はおとなしく椅子に座りながら淹れてもらった紅茶を飲んでいる。凜さんが帰ってこないなのでこの館に釘付け状態なわけだ。この館は想像通りに暇つぶしできるものがなく、そもそもこの世界事態に僕が何時間も暇を潰していられるものなどありはしないのだろう。電子機器など空想の産物だ。よって僕はこの暇な時間を思考し続けることにしようとしたわけなのだ。

この無駄に余りまくった時間を有効活用すべく、これまで得た情報を整理することにする。

聖柄宴。つまり僕だ。現在代理さんの前の神様を探すべく奔走中。不死（仮）。この世界最弱レベルなので猫又と特訓中の身。一人称僕。

凜さん。よろず屋凜の店長。僕を匿ってくれている人。姉御肌。九尾の狐。この世界ハイエンドレベル、らしい。

代理さん。生と死をつかさどる神様（仮）。僕をこの世界に引き込んだ人。常に着物。かわいい。キャラがブレやすい人。それもかわいい。

猫又。凜さんと同じくよろず屋してる人。この世界ハイエンドレベル、らしいパートツー。僕を殺しまくった人。

これに新しく追加で、
吸血鬼。キャラの確立を失敗している人。いろいろと残念。つまり、よくわからない。

狼男。老紳士っぽい。一度友情が芽生えた気がしなくても無かった。

ぐらいか。今のところ先代の情報はゼロだしこれから考えていか

なきゃなあ。あっさりと情報の整理が終了。まだ三十分どころか十分だつて経っていない。どうしたもんか、と思考する事柄について思考する。これもまた嗜好。五秒ほど何も浮かばずボーっとしているとさつきまでいなくなった狼男がすぐ近くにいた。

「おかわりはいかですか？」

そつえばカップはもう空だった。

「そうですね。お願いします。まだ帰ってきそつにないですしね。」

実はさつきから外で爆発音とか炸裂音が絶えず聞こえてきている。あれが聞こえなくなれば大方終わりだろう。

「ええそうですね。あとどれほどかかるのやら。」

新しく注がれた紅茶が注がれたカップを手に持ち、一口飲む。紅茶には疎いので味に関してはスルーする。狼男が僕の向かいの椅子に腰かける。

「さつきから何を考えていたのですか？」

狼男が興味無さげに聞いてくる。彼もまた時間の使い道に困っているのだろう。

「ここに来てからの情報整理を少し。」

「それはまた…。ここに来る以前のことは考えないのですか？」

僕はカップを置いて、カップにできた波紋を眺めながら思考する。

そういえばここに来てから向こうの事はあまり考えないな。それにほとんど思い出すことができない。凜さんあたりが細工して向こうの事を考えさせないようにしているとか？そういえば代理さんと会うあの場所、あそこの入れない扉の向こうが僕の記憶とか？考えて即否定する。ファンタジー以前に凜さんがそんなことをする意味がない。でもあの場所は確かに気になる。ここまで考えて思い出せるのは僕が何かから逃げていて、その途中で代理さんに連れてこられたことぐらい。

「もしかして思い出せないとかですか？」

押し黙った僕をみて狼男が聞いてくる。その瞳に玩具を見つけた子供のような感情を見て取れた。

「そんなことないですよ。まあ確かに思い出しにくいですけど。」

「もしかして凜さまが隠してるとか。」

「それはないですね。理由がないです。」

「理由ならありますよ。あなたがあちらに帰りたいと思わないようにという事前策です。」

「それはないですね。僕は代理さんの手伝いがしたい。だから僕は今ここにいます。」

「それをあなたに自分から考えさせるように記憶に細工したとは考えられませんか？」

「それは…。」

言葉が続かない。続かない自分のボキャブラリーの無さを嘆き、否定できない自分の凜さんへの信頼の値の無さに悔しくなった。

「ここで別の考えを提示しましょう。」

またしても押し黙っていた僕を見かねて狼男は話し出した。

「あなたの記憶が辿れないのはトラウマのせいである、という考え方です。こちらの世界に来ると同時にあちらの世界での嫌な記憶を封じてしまった、ということですよ。因みにこちらだと、さっきの話のおかしな点である記憶が辿れない、という点が矛盾なく通りません。」

「矛盾？」

「そうです。凜さま程の力の持ち主ならば記憶を辿れなくするのはなく、作り変えることだってできたはずなんです。でもそれがなかった。凜さまがやったにはおかしいんです。もしこれが誰かに細工されているのだとしたらもっと低レベルな輩の仕業でしょうね。」

これを聞いて僕は二重の意味で恥ずかしくなった。ひとつは凜さんを疑ってしまったこと、もうひとつはこの矛盾点に気付かなかったことだ。

「凜さんではなくもっと別の誰か、それも力の弱い奴がやった可能性は残っていますけどね。」

僕の身近な人物は他に代理さんと猫又。方や神様代理、方やハイ

エンドレベルの化け物。これはおそらく違つたろう。代理さんがあまり力が無くそれしかできなかったと考えられないでもないが、それは無い。かわいいは正義って誰かが言ってた気がするから。

「さて、トラウマについてですが何か心当たりはありませんか？」

「そうですね。言われてみれば僕がここに連れてこられるとき何かから逃げていました。何かは思い出せませんが。」

「それは興味深いですね。ほぼ間違いないでしょう。どうです？ひとつ暗示を試してみませんか？」

「暗示ですか？あなたが僕に何か仕込むつもりですか？」

「違いますよ。そんなことしたら凜さまにすぐばれて殺されてしまいます。」

そう言つて肩をすくめる。てか今すぐばれてつて言つたな。凜さんだつたら分かるつてことは猫又とかにも分かるんだろ。またこいつ僕を試していやがつたな。

「暗示であなたの記憶を探ってみよう、つてことです。やってみませんか？」

「そうですね…。」

少し考える。凜さんならすぐ分かるつて言つたのはこの人だから嘘をついている可能性もあるんだよな。でもどうせ何か進展しなければ帰れないし、帰る時にも記憶は必要だし。

「分かりました。お願いします。」

狼男は右手を突き出して僕の顔を鷲掴みにした。

「あなたは自分の選んだ扉をひとつ開けてみてください。」

僕は一瞬落ち、気づくと代理さんが一人でブランコに乗っていた。いつものあの場所だ。代理さんはこちらに気づくと呆れた顔を向けてきた。顔からは、また死んだんですか、早いですね、と言いたげな、むしろこれから言うんだろう。言われる前に先手を打つことにした。

「大丈夫です。死んだわけじゃありません。」

代理さんびつくりして目を見開く。そんな姿もかわいいです。僕は固まっている代理さんを無視して背後に振り返り、すぐその小さな扉に手をかける。後ろの僕を呼ぶ代理さんの声を、なぜか誇らしげな気持ちで無視しながら僕は扉を開けた。

そこは小学校の教室のようだ。一番に目に入ってきたのは子供たち数人が一人の席を囲んで何かを話している光景だ。話している、というより一方的に暴言を吐いているようだ。つまるところいじめだ。周りの子たちも見えて見ぬふりをしている。しよっぱなで嫌な扉を開けたなあなんて思った。囲まれている子、つまりいじめられている子が予想通りというか僕だったからだ。僕はこの先の思い出せない展開を憂えてさっそく後悔し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2324v/>

神隠し物語

2011年10月19日04時10分発行